

ここに突破口のあることを知りうるのである。

また、このような大学の理念の現代的意義を常に明らかにしながら、それに伴って教育目標の見直しを行っている。本学では学長の諮問機関として大学運営委員会を毎月定例で開催しているが、この委員会において大学の理念の現代的意義を踏まえつつも、常の学生の現状に即した各学部・学科における教育目標を議論・協議し、その成果を大学教授会、各学部教授会、及び各学科会等に説明し、理解を得るようにしている。なお、大学教授会、学部教授会、運営委員会などについては、「第 11 章 管理運営」に詳述している。

【点検・評価】 大学における理念や建学の精神は、時代や社会の要請によって変わるものではないはずである。理念が変わる場合は、大学そのものが新しく変わることを意味するが、本学の理念は、現代の社会的要請や入学する学生の質の多様化といった状況を踏まえてもなお、ますます重要となっている。しかし一方、時代の変化に対応して、理念の適用やそこから導き出される時代に即した大学の目的や教育・研究の目標は変化を必要とすることがある。それゆえ本学が学長を中心とする大学教授会や大学運営委員会という全学的な協議体制が整えられ、学部や学科を超えた議論が行える状況にあることは、大きな利点であり、評価できるものである。

【課題・方策】 将来に向かって本学がプロテスタント・キリスト教を基礎とする大学ではなくなることはありえない。しかし、時代の変化に応じた具体的教育・研究目標、さらには教育方法等については継続して見直していかなければならない。そのためには、毎年新年に行われている全専任教職員参加の研修会が果たす役割は大きい。また、本学ではキリスト者教職員やキリスト者学生の比率は比較的高い（教育職員（大学院・学部・総合研究所）67%、事務職員 59%、学生（学部・大学院）5%）ものの、各自が持つ思想との関連で、大学の理念への理解と協力体制を整えるために、今後も、教育目標の見直しを、大学全体の課題として議論し続けなければならない。

3 健全性、モラル等

1) 教職員・学生のモラルの確保

（C群：大学としての健全性・誠実性、教職員及び学生のモラルなどを確保するための綱領等の策定状況）

【現状の説明】 本学院全体の建学の精神でもある「神を仰ぎ人に仕う」を達成するにあたって、学生、教職員のモラルを確保することは極めて重要であり、そのことがまた、大学の健全性にもつながることになる。大学の理念においては第 7 条以降にその関連の条項が示されるが、教職員については「互いの人格を尊重し、各自の持ち場においてそれぞれに相応しい責任を自発的かつ積極的に遂行するとともに、キリスト教的な愛と謙遜と熱意をもつ

第1章

大学の理念・目的および学部等の使命・目的・教育目標

て互いに協力し合うことが期待される」と本学における教職員の基本的あり方が明示されている。また学生に対しては、「知的、実践的のみならず霊的次元において成熟し、かつ専門の学問の研鑽とその応用力の修得に努め、現代社会の課題に取り組み、明日の社会を担い得る教養と良識とを身につけ、豊かで個性的な人格形成に努めること」が期待されている。その他、学内にはセクシャル・ハラスメント等に関連した人権・情報保護委員会を設置し、パンフレット配布、研修会や講演会の開催など積極的な啓蒙活動に取り組む他、これとは別に相談窓口となる教職員を通して、人権や情報保護等に関する具体的なトラブルなどが発生した場合に対応する組織上の体制を整えている。

【点検・評価】 本学では大学の設置にあたり、まず理念を作成した。このことは本学がどのような理想と精神を持っているか、さらには大学の構成員である教職員、学生はどうあるべきか、ということ内外に明確に示してスタートしたことを意味する。したがって、その後本学の組織に加わるすべての教職員、学生に対してこの理念を理解し共鳴できることをまず求めているが、その意味では倫理的にも高い水準が要求されている。また、このことは新年毎の教職員研修会やアッセンブリアワーなどの機会を通して常に周知しているが、このように本学では、キリスト教精神が単なる飾り物ではなく、実質的に命を持った形で大学が運営されている。この点は高く評価しうる。

近年、セクシュアル・ハラスメント、パワー・ハラスメント、さらには個人情報保護などの問題が大きく取り扱われ、日本の教育研究機関においても様々な問題が噴出している。キリスト教精神とは基本的に個人・人格を大切に扱うものであるため、本学においては学生、教職員のモラル違反に対しては、厳しく、かつ適切に対処、処理している。この点は、学内のモラル維持・向上に大いに役立っていると判断できる。

【課題・方策】 本学はキリスト教大学として学生、教職員のモラル維持・向上に対して特段の努力を払ってきている。このことは本学の建学の精神とも直接的に結びつく課題であり、今後とも継続的に行われる必要がある。